

精神科医療における開かれた会話ーリフレクティング・プロセスの試みー

○西池絵衣子¹⁾、末安 民生²⁾、松本 奈央¹⁾

1) 兵庫県立大学看護学部、2) 佛教大学保健医療技術学部

看護実践で求められるコミュニケーション。臨床ではコミュニケーションがうまくいかない、会話が困難だと思うことがあり、葛藤や迷い、伝わらなさを感じる機会も遭遇することがよくあります。

企画者らは精神科領域の現場や現任教育において、どのような方法で看護師同士が率直に互いのかかわりを通して患者の人生の物語と向き合うことができるのか、互いに気づけなかった患者や関係者の新たな一面を見出すことにはなにが必要なのかを考えながら取り組んできました。

そのような折、ある研究活動を通して 2015 年から家族療法の実践方法としてノルウェーのトムアンデルセンによって提唱され、フィンランドのケロプダス病院の地域精神科医療の取り組みとして実施されていたリフレクティング・プロセスを学ぶ機会を得ました。リフレクティングとは、「はなす」=外的会話（他者との会話）と（「きく」=内的会話 自分との会話、あるいは自分の内なる他者との会話）

という2つの会話を丁寧に重ね合わせ、うつし込み合わせながら、会話を展開します。そして場も作っていきます。

これまでの実践や研究の中で、困っている人や心配を抱えている人にかかわるすべての人が一堂に会して、お互いに敬意を示し、語り合う、聞き合う、対話を行う、そしてリフレクティングを用いた対話は、緊張を生まざるを得ないと思っていたかかわりに想定外の自由さ、臨機応変さをも感じ取ることができました。

本ワークショップにおいては、昨年度に続きロールプレイを通して、自分との対話や他者との対話の深まり、支援の広がりについて考えてみたいと思っています。リフレクティング・プロセスをよく知らないけれども関係性の学びを深めたい方や、リフレクティング・プロセスの基本や意義を学びたいなど関心がある方の参加を歓迎します。